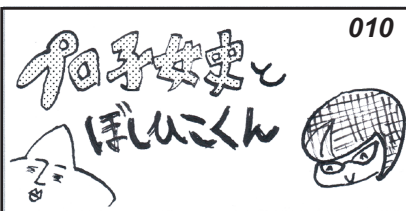


プロ子女史 (左)
…人材プロオフィスのイ
メージキャラクター
ぼしひこくん (右)
…地域サイト「枚方つー
しん」のキャラクター

■ 100年企業へ向けて新たな挑戦
■ 四コマ漫画
■ 小説 プロ子の野望



30年目の人材プロオフィス が掲げる100年企業へ 向けて新たな挑戦

末吉社長独占インタビュー

大阪府枚方市に本社を構える人材プロオフィス株式会社は17年4月に設立30周年を迎えた。労働問題がメディアを騒がせている昨今、人材ソリューションを提案する企業としてのあり方を、創業者である人材プロオフィス株式会社代表取締役末吉修社長（以下…末吉）に聞いた。

大阪府枚方市に本社を構える人材プロオフィス株式会社は17年4月に設立30周年を迎えた。労働問題がメディアを騒がせている昨今、人材ソリューションを提案する企業としてのあり方を、創業者である人材プロオフィス株式会社代表取締役末吉修社長（以下…末吉）に聞いた。

人材のプロを届けたい

― 設立30周年おめでとうございませう。

末吉…ありがとうございます。

― まずは設立時の話を聞かせていただければと思います。



(末吉修社長)



85年頃の末吉社長
(写真左)

看板をあげたのは、85年に阪神タイガースが日本一になった年なのでよく覚えています。

― 看板をあげたのは、85年に阪神タイガースが日本一になった年なのでよく覚えています。

末吉…人材プロオフィスの看板は85年の4月にはあげていたんですが、最初は末吉工業という会社も運営していたので、2社掛け持ちです。

― 2社掛け持ちです。

末吉…人材プロオフィスの設立は87年と2年ほど遅れてしました。

― 2年ほど遅れてしました。

末吉…大手建設機械メーカーの、部品の梱包を請負っていました。その後、職人さんたちの派遣を行うようになり、その当時から全国へ進出したという気持ちがありました。

― 末吉工業ではどんなお仕事を？



― 30年という歳月を振り返っていかがですか？

末吉…すごく短かったですね。もう30年？という感覚です。若い頃は各地の営業所を作る場所から全て自分でやっていたので、いつも仕事に追われているという感じでした。

― あつという間だったと。

末吉…そうですね。年齢も62歳になったんですが、自分でもピンとこないんですよ。身体はもうろん歳をとっているんですが、気持ちの面ではまだまだという感覚です。

― 30年の間に様々な変化もあったと思います。

末吉…最初は技術屋である職人さんの派遣だけだったんですが、幅広い職種でお客さまのニーズに応じていけるように変化してきました。

今、日本は人手不足と言われ、これからますますこの問題は深刻化していくでしょう。すでに言われていることもありますが、そのためには3つの力を積極的に使っていくことが有効だと考えています。

― 3つの力ですか？

末吉…はい。

- 1 眠っている女性の力
- 2 定年した方の力
- 3 外国人労働者の力

この3つの力をいかに使っていくかが重要です。

結婚・出産で仕事を離れてはいるけれど、優秀な女性の方の力。定年退職された経験豊富な優秀な方々の力。そして、日本だけで考えていると、20年・30年後は間違いなく労働力が枯渇します。

外国人労働者の方々の力を活かすことが必ず必要になります。

― なるほど。

世界を見据える

末吉…アジアを含めた海外へ進出をしていくつもりです。

海外からの労働力を日本で活用するだけでなく、日本で採用した外国人労働者の方を、逆に海外へ派遣して日系企業さんで活躍してもらおう…そんな考え方も大事になってくると思います。

人材を日本だけでなく、世界の中でどうまわしていくか。

― そういった広い視点が必要だと感じますね。

夢を食べて夢に生きる

― 今後百年企業を目指して進まれると思いますか？

末吉…百年と言わず、ずっとと続いて欲しいですね。

ただ、百年生き残っていく企業になるためには、今だけの売上ではなく、10年後・20年後、そして70年後の会社を考え、どう動いていくのかも大事だと思っています。

― 70年後の会社を考えろ…

末吉…そうです。余談ですが、私は若い頃プロとしてボクシングをやっていたんです。

野球などのメジャースポーツと違い、ボクシングはピラミッドの頂点になった人だけしか食べられない。

トレーニングの厳しさもありますし、アルバイトやそれこそ派遣の仕事などをしながら食いつないでいかなければならない。

練習が終わってからも掛け持ちの仕事に行ったりしました。

― それでも続けられた理由はなんですか？

末吉…やっぱり夢があったからだと思います。

ご飯は満足に食べられないけれど、「夢を食べて生きていくんだ！」という気持ちがありました。

寝ている時にみる夢は目が覚めたら忘れてしまいます。

でも起きている時にみることが出来る夢を見続け、その夢を食べ続けていければ、仕事も頑張っていけるんじゃないかと思っています。



社長室には『我が人生、夢を喰らいてこれを貫く』と書かれた掛け軸が。

― 最後にこのインタビューをお読みになつて、皆さんにひと言お願いします。

末吉…感謝の心を忘れずに、プロ意識を持った方々をお客さまの戦力として派遣していきたいと思っています。

お客さまと一緒に頑張って、お客さまと共に大きくなっていきたいと思いますので、今後とも人材プロオフィス株式会社を何卒よろしくお願いいたします。



人材プロオフィス株式会社
本社社員の皆さん

プロ子の野望

【前回のあらすじ】就職活動中のプロ子はある会社の説明会で疑問を感じる。答えを探し人財プロオフィサーの大木の過去と現在の夢に触れるが…

大林と別れ自宅に帰ると、話を聞いていただけのハズなのにぐったり疲れていた。バスタブにお湯を張る元気もなく、簡単にシャワーですませて少しさっぱりはしたものの、心のモヤモヤはおさまる気配もない。

（母に相談してみようか…）

これまで進路のことで両親に相談することもなく、なんでも自分で決めてきた。だから、こんな風に思うこと自体にプロ子自身が一番驚いていた。



楽しそう。そんな母親の明るさが自分の影を浮かび上がらせる、うとましい存在と感ずることも少なくはなかった。ただ、母なら「働く」ということに対して何らかの哲学を持っているのではないか？ そんな期待がプロ子を動かす、気がつく。母に電話をかけていた。

（どうせ忙しいから出るハズないか…）あきらめて電話を切るやいなや、母から折り返しの電話がかかってきた。あわてて通話ボタンを押す。

「え？ 何？ 事件？ 事故？ アンタ大丈夫？」

こちらが話す間も与えずにクエスチョンを放り込まれたプロ子は、思わず「ぶつ」と吹き出してしまった。笑い声を聞いた母はさすがに続けた。「なににな？ ドッキリとか？ もしくはテレビ収録？ えー！ そういうのイヤなんだけどー！」

（つづく）